様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２４８１

研究課題名（和文）日本語と朝鮮語における節連結の対照言語学的研究―中止法によるものを中心に―

研究課題名（英文）Contrastive Linguistic Studies on Clause Linkages in Japanese and Korean: With Special Reference to the Continuative Form as a Conjunction

研究代表者
塚本　秀樹（TSUKAMOTO, Hideki）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：６０２０７３４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本語と朝鮮語における節連結にかかわる複合格助詞や敬語表現などについて詳しく考察すると，動詞連用形は，朝鮮語に比べて日本語の方が広範囲にわたって利用されていることが明らかになる。また，両言語間のこの相違は，朝鮮語は語なら語，節・文なら節・文といったように，基本的には語と節・文の地位を区別する仕組みになっているのに対して，日本語は語と節・文が重なって融合している性質のものが存在する仕組みになっている，といった両言語間における形態・統語的仕組みの相違が起因していることが証明される。

研究成果の概要（英文）：Detailed examination of compound case particles and honorific expressions in Japanese and Korean, which are related to clause linkages, shows that the usage of adverbial verb forms is broader in the system of grammar in Japanese than in Korean. It can be demonstrated that this difference in adverbial verb forms between the two languages is caused by differences in morphosyntax, characterized by the fact that Korean differentiates between the status of word and clause/sentence, whereas in Japanese it is possible for word and clause/sentence to exist in a fused state.

研究分野：言語学

キーワード：日本語　朝鮮語／韓国語　節連結　対照言語学　動詞連用形　複合格助詞　敬語表現　主節／従属節

１．研究開始当初の背景

(1) 研究代表者の塚本は，これまでの一連の研究で次のことを明らかにした。
① 日本語と朝鮮語における諸言語現象について考察すると，日本語では文法化が生じているものが比較的多いのに対して，朝鮮語では文法化が生じているものが比較的少なく，両言語間で文法化の進度の違いがあることを見出すことができる。
② 朝鮮語は，語なら語，節・文なら節・文といったように，基本的には語と節・文の地位を区別する仕組みになっているのに対して，日本語は，語と節・文が重なって融合している性質のものが存在する仕組みになっている，といった両言語間における形態・統語的仕組みの違いが導き出せる。

(2) また，文法化については，これまで研究代表者の塚本が動詞表現に，研究分担者の堀江が名詞表現にそれぞれ重点を置きながら，それぞれ異なる形態・構文や現象を考察対象としてきた。その形態・構文や現象は，具体的には動詞表現に関連して複合格助詞，複合動詞，「～ていく」構文・「～てくる」構文とそれに対応する朝鮮語の表現など，また名詞表現に関連して名詞化構文，名詞修飾構文，「～のだ」構文とそれに対応する朝鮮語の表現などである。

(3) 研究代表者の塚本と研究分担者の堀江それぞれによるこれまでの研究を踏まえ，研究代表者の塚本と研究分担者の堀江が常時，連携をとって相補う形で共同研究を行えば，非常に効果的な研究に結び付き，多大な研究成果を挙げることができると期待されることから，平成 23～25 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）の計画調書を提出し，採択された。

(4) 研究代表者の塚本と研究分担者の堀江は，この研究計画に基づいて研究を進めることにより，得られた研究成果を論考で公表しており，多くの研究成果を得ることができた。そのうちの一つとして，文法体系における動詞連用形の位置づけが両言語間で異なることが，両言語間における形態・統語的仕組みの違いに影響を及ぼしていることを明らかにしたが，着目した節連結の形式は，両言語ともに中止法としての動詞連用形のみであった。

(5) ところが，その動詞の中止法に限っても，日本語は，(A)「動詞連用形」と (B)「動詞連用形＋接続語尾『て』」の 2 種類であるのに対して，朝鮮語には，日本語の場合と同様である (A)「動詞連用形」と (B)「動詞連用形＋接続語尾 se」の 2 種類に加えて，(C)「動詞語幹＋接続語尾 ko」と (D)「動詞語幹＋接続語尾 mye」の 2 種類もある。

(6) こういった節連結に関する両言語間の相違が，前述の平成 23～25 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）による文法化及び形態・統語的仕組みに関する考察において残された問題を解く鍵を握っていると考えられ，本研究課題の設定に発展して結び付いた次第である。

２．研究の目的

(1) 日本語と朝鮮語における節連結には，これまでの考察でわかっているものも含めて具体的にどういったものがあるのか，ということを明らかにし，それを整理して記述する。

(2) 両言語における文法化現象には，これまでの考察でわかっているものも含めて具体的にどういったものがあるのか，ということを明らかにし，それを整理して記述する。

(3) 上述した形態・統語的仕組みに関する両言語間の相違を反映させている現象には，これまでの考察でわかっているものも含めて具体的にはどういったものがあるのか，ということを明らかにし，それを整理して記述する。

(4) 上記 (1) の中でも特に動詞の中止法による節連結に着目し，両言語間のその類似点と相違点を，対照言語学からのアプローチで明らかにする。

(5) 上記 (4) における両言語間の相違点の一つとして，形式と種類が日本語よりも朝鮮語における方が豊富である，ということが指摘できるが，なぜそのようになっており，そのことから何に結び付いていき，どういったことが言えるのか，ということについて対照言語学からのアプローチで探究する。

(6) 上記 (5) に合わせて，これまで不明確なままであった朝鮮語における個々の形式の使い分けについても考察し，明らかにする。

(7) 上記 (5) の探究の際には，特に，形態・統語的仕組みに関する両言語間の相違が節連結に関する両言語間の相違にいかに影響を及ぼしており，また影響を及ぼしていないのか，といった二者の相互関係に着目し，その実態を明らかにする。

(8) 上記 (5) の探究の際には，どういった文法化とかかわり合っており，またかかわり合っていないのか，ということにも着目し，その実態を明らかにする。

(9) こういったことによって得られた研究成果が，さらに次の段階として本研究課題とは別に言語類型論からのアプローチで行う予定にしている研究にどのように結び付いていくのか，ということについても考察する。

３．研究の方法

(1) 入手した言語学関係の図書・論文によって，これまでに行われてきた理論的なアプローチからの考察を検討し，入手した日本語と朝鮮語に関する参考書によって，まずは記述されている範囲内でそれぞれの言語の事実を確認する。

(2) 実際に使われている日本語と朝鮮語の例をコーパスや新聞・雑誌・小説などから収集し，言語事実を明らかにする。

(3) 研究代表者及び研究分担者の直感が効かない朝鮮語に関しては，それぞれの所属研究機関で母語話者に対して入念なインフォーマント調査を行い，従来の参考書には記述されていなかったり記述が詳しくなかったりする言語事実を明らかにする。

(4) 上記 (1) (2) (3) によって得られたデータと情報については，研究代表者と研究分担者の間でその都度，連絡をとって提供し合う。

(5) 上記 (1) (2) (3) で得られたデータと情報について検討するとともに，思索中の研究代表者及び研究分担者自身の考えについて意見交換を行う。

(6) 思索中の研究代表者及び研究分担者自身の考えについて他の多くの研究者と議論し，また助言を仰ぐ。

４．研究成果

(1) 研究代表者の塚本は，節連結にかかわる問題の根源をなすと考えられる動詞連用形について考察し，次のことを明らかにした。
① 動詞連用形は，朝鮮語に比べて日本語の方が広範囲にわたって利用される。
② 朝鮮語における動詞連用形は，基本的には節・文レベルで用いられるが，日本語における動詞連用形は，節・文レベルのみならず，語レベルにまで入り込んで用いられる。

(2) 研究代表者の塚本は，日本語における単一格助詞「に」を伴う複合格助詞のうち，「～にかけて」「～にわたって」「～に際して」「～にあたって」「～につれて」の五つを取り上げ，日本語でその各々が用いられる場合，朝鮮語ではどのように表現されるのか，ということについて考察した結果，次のことを明らかにした。
① 日本語で複合格助詞を用いて表現するところを，朝鮮語でも直接対応する複合格助詞を用いて表現することができる場合がある程度，存在するが，今回の調査では非常に限られている。
② 日本語で複合格助詞を用いて表現するところを，朝鮮語では直接対応する複合格助詞がないため，意味的に間接に対応する別の複合格助詞を用いて表現する場合もある程度，存在するが，今回の調査では限られている。
③ 日本語で複合格助詞を用いて表現するところを，朝鮮語では同様に複合格助詞を用いて表現するのではなく，(A)接続語尾，(B)動詞連用形，(C)単一格助詞，(D)名詞，をそれぞれ用いるといった，複合格助詞とは別の方法で表現する場合が多く見られる。
④ 事態を叙述する際，単一格助詞を用いるだけでは，それが可能とならない場合があり，複合格助詞は，含んでいる動詞を利用し，それが有する意味で補うことによって，単一格助詞と，接続語尾あるいは動詞連用形による従属節との間を埋め合わせる機能を備えている。
⑤ 上記④のような機能を備えた複合格助詞を，日本語は朝鮮語に比べると，豊富に有しているが，朝鮮語においてその点がやや乏しくなっているのは，朝鮮語では単一格助詞と接続語尾あるいは動詞連用形による従属節に委ねられた表現が多用される結果である。
⑥ 動詞連用形は，朝鮮語に比べて日本語の方が広範囲にわたって利用されており，朝鮮語における動詞連用形は，基本的には節・文レベルで用いられるのに対して，日本語における動詞連用形は，節・文レベルのみならず，語レベルにまで入り込んで用いられる。
⑦ 複合格助詞に関する両言語間の相違は，上記⑥に示した，動詞連用形の性質に関する両言語間の相違が反映されている。
⑧ 上記③に示した両言語の様態は，諸言語現象について考察することによって導き出された「『形態・統語的仕組みの違い』という根本的な要因」と合致する。
⑨ 日本語における複合格助詞の方が朝鮮語における複合格助詞よりも文法化が生じているものが多い。
⑩ 上記③⑥⑨に示した両言語の様態は，「形態・統語的仕組みの文法化とのかかわり」にまさに当てはまる。

(3) 研究代表者の塚本は，日本語と朝鮮語における敬語表現に着目して考察し，指摘された両言語間の相違からどういったことが導き出せるのか，ということについて次のことを明らかにした。
① 議論の前提となる，日本語と朝鮮語における敬語表現の要点を論述するとともに，敬語表現に関する両言語間の類似点と相違点を明らかにした。
② 朝鮮語における敬語表現は，一部の限られた名詞にもかかわって生じているものの，基本的には動詞述語（及び形容詞述語や名詞述語）において成り立っているのに対して，日本語における敬語表現は，動詞述語ばかりではなく，名詞にも深く関与して成立している。
③ 他の言語現象の考察によって明らかにされた，日本語は名詞中心的な表現をとる言語

であるのに対して，朝鮮語は動詞／形容詞中心的な表現をとる言語である，という両言語間の指向性の相違は，敬語表現においても反映されている。
④ 上記②にかかわる両言語間の相違は，日本語では動詞連用形がそのまま名詞として機能するのに対して，朝鮮語ではそういったことが認められない，という両言語間の別の相違が一要因となって引き起こされている。
⑤ 上記④の動詞連用形にかかわる両言語間の相違は，研究代表者の塚本がこれまで諸言語現象について考察して明らかにした「形態・統語的仕組みの違い」という根本的な要因に依拠していると考えられる。

(4) 研究分担者の堀江は，日本語と朝鮮語における「言いさし（従属節の非従属化）」現象及び「主節現象」について，言語類型論の観点から，他言語との対照も視野に入れつつ，両言語間の相違点と類似点を分析し，次のことを明らかにした。
① 両言語ともに「言いさし」現象については，生産的であり，文末の述語形式の選択を多様化する上で効果的に用いられ，様々な語用論的効果を発現している。
② 従属節内に主節的な現象が表象される「主節現象」については，日本語では名詞修飾節内部において直接引用や丁寧形などの様々な主節現象が現れるのに対して，朝鮮語では主節現象に厳しい制約が課せられている。
③ 主節と従属節が連続性をなしている証左となる現象は，朝鮮語よりも日本語における方が顕著に見られる。

(5) 研究分担者の堀江は，奥津（2005）が日本語で指摘した，名詞修飾節が機能的に連用修飾節と近い振る舞いをする「連体即連用」の現象について，朝鮮語において考察した結果，朝鮮語でも同様の現象が確認できることを明らかにした。

(6) 研究分担者の堀江は，朝鮮語の文法化の過程で，ko iss という典型的に「動作進行」を表す形式が新聞や雑誌などにおいて，日本語の「ている」に一見平行的な「パーフェクト」の機能を拡張している現象と，ta nun という日本語の「という」に対応する形式が文末形式に転ずる現象を，日本語との対比を通じて分析した。その結果，朝鮮語では，新奇な用法が報道やインターネットといった特定のジャンルにおいて流通しても，そのジャンルの枠を超えてなかなか一般化しない，という特徴が見られることを明らかにした。

(7) 研究分担者の堀江は，談話小辞の機能拡張・機能変化に関して中国語の「必須」というモーダルマーカーが談話小辞に機能変化する現象と，マレーシア語の小辞 kan が日本語の終助詞「さ」や「～じゃない」という文末形式に一部共通し，さらに多様な機能を拡張させる現象についても考察した。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）
① 塚本秀樹，2018，「日本語における単一格助詞『に』を伴う複合格助詞とそれに対応する朝鮮語の表現について―対照言語学からのアプローチ―」，藤田保幸・山崎誠（編）『形式語研究の現在』，pp. 515-559，和泉書院，査読なし
② Horie, Kaoru. 2018. Subordination and Insubordination in Japanese from a Crosslinguistic Perspective. In Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (Eds.), *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, pp. 697-718. Berlin: De Gruyter Mouton. 査読あり
③ Horie, Kaoru. 2017. The Attributive versus Final Distinction and the Manifestation of “Main Clause Phenomena” in Japanese and Korean Noun Modifying Constructions. In Yoshiko Matsumoto et al. (Eds.), *Noun Modifying Constructions in Languages of Eurasia: Rethinking Theoretical and Geographical Boundaries*, pp. 45-57. Amsterdam: John Benjamins. 査読あり
④ 朱冰・堀江薫，2017，「束縛的モダリティと必要条件文の関連―中国語・日本語・韓国語の対照を通して―」，『言葉と文化』18，pp. 33-44，名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻，査読なし
⑤ Moriya, Tetsuharu and Kaoru Horie. 2015. Neg-raising as a Product of Grammaticalization. In Andrew D. M. Smith et al. (Eds.), *New Directions in Grammaticalization Research*, pp. 121-134. Amsterdam: John Benjamins. 査読あり
⑥ 勝田順子・堀江薫，2015，「マレーシア語のパーティクル kan の多機能性―文法化の観点から―」，『関西言語学会論文集（KLS）』35，pp. 49-60，査読あり
⑦ 朱冰・堀江薫，2015，「中国語のモーダルマーカー“必須（bixu）”の節連結機能―文法化と機能拡張の観点から―」，『日本認知言語学会論文集』15，pp. 422-433，査読あり

〔学会発表〕（計１３件）
① 堀江薫，「日本語の名詞修飾表現と言語類型論」，国立国語研究所（NINJAL）Prosody and Grammar Festa 2 シンポジウム，2018 年 2 月 17 日，国立国語研究所，招待講演
② 堀江薫，「連体（および準体）はどこまで連用を代行できるか？―日本語（・韓国語）

との対比を通じて―」, Nagoya-de-Socio 研究会, 2018 年, 名古屋大学東山キャンパス, 招待講演

③ 田邊泉・堀江薫,「認識のモダリティ『かもしれない』の拡張用法に関する機能論的分析―韓国語『-kes kathta』との比較を通して―」, 関西言語学会第 42 回大会, 2017 年, 京都大学吉田キャンパス

④ 堀江薫,「語用論と言語類型論の関係を『動的に（？）』再考する」, 第 6 回動的語用論研究会, 2017 年, 京都工芸繊維大学, 招待講演

⑤ 堀江薫,「英語における連体と連用の関係―日本語(・韓国語)との対比を通じて―」, 言語の類型論的特徴を捉える対照研究会第 6 回公開発表会, 2017 年, 大阪府立大学 I-site なんば, 招待講演

⑥ 塚本秀樹,「動詞連用形をめぐる日朝対照言語学的研究の諸問題」, 朝鮮語研究会第 250 回記念シンポジウム「言語学と朝鮮語」, 2016 年 9 月 11 日, 東京大学駒場キャンパス, 招待講演

⑦ 塚本秀樹,「日本語の複合格助詞とそれに対応する朝鮮語の表現をめぐって―『に』を伴う複合格助詞を中心に―」, 第 12 回形式語研究会, 2016 年 8 月 20 日, 北海道教育大学札幌駅前サテライト

⑧ 堀江薫,「日本語と韓国語の『主節』と『従属節』―言語類型論の観点から―」, 朝鮮語研究会第 250 回記念シンポジウム「言語学と朝鮮語」, 2016 年 9 月 11 日, 東京大学駒場キャンパス, 招待講演

⑨ 江俊賢・堀江薫,「日本語・台湾華語・韓国語の『類似性形式』の文末用法―機能拡張の観点から―」, 日本認知言語学会第 17 回大会, 2016 年 9 月 10 日, 明治大学

⑩ 堀江薫,「『非従属節』の類型論―日本語・英語・韓国語・インドネシア語・フィンランド語の事例に基づいて―」, 第 8 回奈良女子大学文学部英米言語文化学講演会, 2016 年 8 月 10 日, 奈良女子大学, 招待講演

⑪ 堀江薫,「『非従属節』のタイポロジー―言語類型論研究と『言いさし』研究の接点―」, 第 70 回 NINJAL コロキアム, 2016 年 6 月 7 日, 国立国語研究所, 招待講演

⑫ Horie, Kaoru. Grammaticalization Phenomena in Korean and Japanese: Parallelism and Divergences. 2015 Summer Joint Conference of the Linguistic Science Society, the Korean Association of Language Sciences, and the Mirae English Language and Literature Society. August 20, 2015. Busan National University. Invited Lecture.

⑬ Horie, Kaoru. Genre-specificity of Some Grammaticalization Processes in Korean: A Contrastive Study with Japanese. 国立国語研究所国際シンポジウム「文法化：日本語研究と類型論的研究」, 2015 年 7 月 4 日, 国立国語研究所, 招待講演

〔図書〕（計１件）

① 福田嘉一郎・建石始・塚本秀樹他, 2016,『名詞類の文法』, pp. 240, くろしお出版, 査読なし

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
該当なし

６．研究組織

(1) 研究代表者
塚本　秀樹　（TSUKAMOTO　Hideki）
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：６０２０７３４７

(2) 研究分担者
堀江　薫　（HORIE　Kaoru）
名古屋大学・人文学研究科・教授
研究者番号：７０１８１５２６

(3) 連携研究者
該当なし

(4) 研究協力者
該当なし